

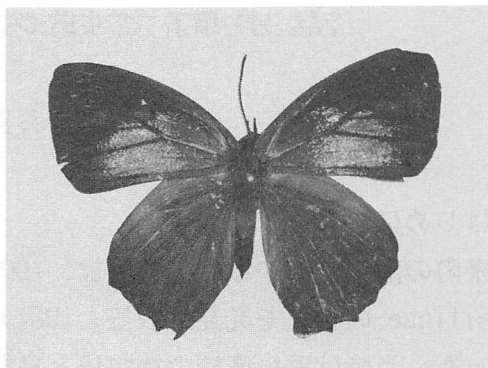
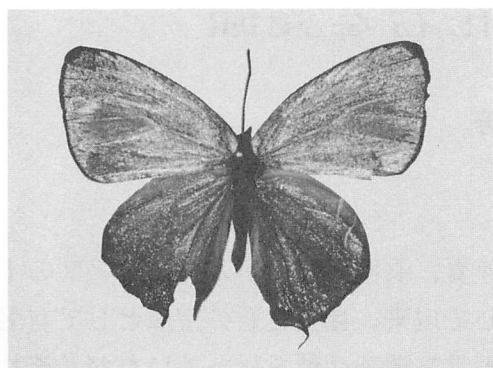
兵庫県に キシマミドリシジミは分布する？

谷角素彦

豊岡市に住んでいた中学・高校生時代、ゼフィルスに強い憧れを抱いていた。図鑑を眺めては溜め息をつき、何とか1種でも多く自らの手で採集してみたいと常々考えていた。その頃ネットにすることのできたものといえば、アカシジミ・ウラナミアカシジミ・ウラゴマダラシジミ・オオミドリシジミなど豊岡市近郊で採れる種がほとんどであった。皮肉にも、大学生になり但馬地方を離れてから、小代溪谷（美方町）や扇ノ山（温泉町）などを訪れる機会が多くなり、メスアカミドリシジミやアイノミドリシジミ・フジミドリシジミなど山地性の種が身近になった。東床尾山（出石町）でヒサマツミドリシジミ、阿瀬溪谷（日高町）でオナガシジミという大物を記録するに至り、但馬地方に産するゼフィルスは一通り出揃ったが、小生の頭の中にはキシマミドリシジミは分布するのかわからないのかという問題がくすぶっていた。この蝶の食樹であるアカガシは来日岳（城崎町）などにあり、山頂付近には大規模なアカガシ林がみられる。以前、当会の有志で採卵調査を試みたこともあったが、空しく引きあげてきた。

その後何年かが経過した。ある日、蝶研出版の小路氏と話していると氏より、関宮町の民宿Gに県下で採れたというキシマミドリの標本があるらしいというニュースを耳にした。

1988年5月22日、いつものように足立氏と但馬地方に採集に出掛け、雨に降られて時間を持て余し気味だったとき、その民宿に寄ってみようという気が起こった。目指す民宿は、小雨に煙る中にたたずんでいた。事情を話すと御主人であり採集者でもあるN氏は快く迎えてくださり、問題の標本を出してこられた。標本箱には雑多なチョウに混じって確かにキシマミドリ1♂1♀が収められていた。御主人の話は以下のようなものであった。「宿泊客で虫好きな人がいることから、私もその影響でチョウを採るようになりました。仕事の合間に関宮町内でネットを振る程度ですが、お客さんにこの付近にはこんなチョウがいるということを知ってもらうために気楽にやっています」この言葉どおり、標本の状態は良くないし、何より致命的なのはラベルがついていないことであった。N氏にこのチョウ



問題のキリシマミドリシジミ♂(左)と♀(右)

を採集された状況を尋ねると「はっきりとした記憶はありません。ゼフィルスは1984年頃、杉ヶ沢付近でよく採集したので、そこで採ったのかもかもしれません」

この標本が御自身で採集されたものに間違いないとすれば、兵庫県下で本種が採れたことは事実であろう。ただ、データがついていないのはかえすがえすも残念で、この標本は科学的意味を持たないものであると言わざるを得ない。

杉ヶ沢といえば兵庫県北部ではもっとも有名なフィールドのひとつであり、京阪神や播磨を中心に全国から多くの採集者が訪れる。筆者も、何度もここでネットを振った経験があるが、キリシマミドリが目の前に現れたことはもちろんない。この蝶の出現期はゼフィルスのなかでは遅く8月頃がピークだが、この時期にはオオウラギンヒョウモンを目指してやはり採集者がかなり入っているものと思われる。また、杉ヶ沢あたりではアカガシを目にした記憶もない。もうひとつ付け加えるなら、採れているのが1♂1♀であることに多少のひっかかりも感じる。ただ、分布していないことの証明は難しく、こういう標本が実在しているから、問題はますますややこしい。

本種はゼフィルスのなかでも人気の高い種であるが、兵庫県下ではこれまでに記録されたことがなく、各種文献をあたって、県下には産しないことになっている。頭からキリシマミドリシジミはいないと決めてかかり、調査が充分になされていないのも、また事実である。この報文を問題提起としてとらえていただき、「兵庫県下にもキリシマミドリは分布するのでは．．．」という観点で、当地を訪れる人には新たな目で調査を試みてもらいたい。そして何より、地元同好者である当会会員の蝶屋さん達の奮起に期待したい。